

# 日蓮大聖人御書全集

おおたにゅうどうどのごへんじ

## 太田入道殿御返事

新版

1358

ς

1363

おおたにゅうどうどのごへんじ

# 太田入道殿御返事

けんじがんねん

がつ にち

さい

おおたじょうみよう

建治元年 ('75)

11月3日

54歳

大田乘明

きさつ

ひら

はいけん

おんいた

ひと

なげ

貴札、これを開いて拝見す。御痛みのこと、一たびは歎き、  
に

二たびは悦びぬ。

維摩詰経に云わく「その時、長者・維摩詰、自ら念え  
い い とき ちょうじや ゆいまきつ みづか おも

らく『寝ねて牀に疾む』。その時、仏、文殊師利に告げた  
とき ほとけ もんじゅしり つ

まわく『汝、維摩詰に行詣して疾を問え』と「云々。

だいねはんぎよう

い

とき

によらないないしみ

やまいあ

げん

大涅槃経に云わく「その時、如来乃至身に疾有るを現じ、

みぎわき

ふ

か

びょうにん

うんぬん

ほけきよう

右脇にして臥したもう。彼の病人の「とくす」云々。法華経

に云わく「少病少惱」云々。止觀の第八に云わく「毘耶  
に偃臥するがごときは、疾に託して教えを興す乃至如來は  
滅に寄せて常を談じ、病に因つて力を説く」云々。

また云わく「病の起ころ因縁を明かすに、六つ有り。一

には四大の順ならざるが故に病む。二には飲食の節ならざ  
るが故に病む。三には坐禅の調わざるが故に病む。四には  
鬼便りを得。五には魔の所為なり。六には業の起ころが故に  
病む」云々。大涅槃經に云わく「世に三人のその病治し難  
きもの有り。一には大乘を謗す。二には五逆罪あり。三に

は一闡提なり。かくのごとき二病は、世の中の極重なり  
云々。また云わく「今世に悪業成就し乃至必ず應に地獄な  
るべし乃至三宝を供養するが故に、地獄に墮ちずして現世  
に報いを受く。いわゆる頭と目と背との痛みなり」等云々。  
止觀に云わく「もし重罪有るも乃至人中に軽く償う。こ  
れはこれ業の謝せんと欲するが故に病むなり」云々。  
龍樹菩薩、大論に云わく「問うて云わく、もししからば、  
華嚴經乃至般若波羅蜜は秘密の法にあらず。しかるに法華  
等は乃至譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬となすがごと

し」云々。天台、この論を承けて云わく「譬えば、良医の能く毒を変じて薬となすがごとし乃至今經に記を得るは、すなわ即ちこれ毒を変じて薬となす。故に、論に云わく『余經は秘密にあらず、法華を秘密となす』と」云々。止觀に云わく「法華能く治す。また称して妙となす」云々。妙樂云わく「治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」云々。

大經に云わく「その時、王舍大城の阿闍世王その性弊悪にして乃至父を害し已わつて、心に悔熱を生ず乃至心悔熱するが故に、遍体に瘡を生ず。その瘡、臭穢にして附近

すべからず。その時、その母にして韋提希と字づくるものは、種々の薬をもつてためにこれを傳く。その瘡、ついに増して降損有ることなし。王即ち母に白す。『かくのごとき瘡は心に従つて生ず。四大より起くるにはあらず。もし衆生に能く治する者有りと言わば、この処有ることなけん』と云々。『その時、世尊・大悲導師、阿闍世王のために月愛三昧に入り、三昧に入り已わつて、大光明を放ちたもう。その光、清涼にして、往つて王の身を照らすに、身の瘡即ち愈えぬ』云々。平等大慧の妙法蓮華経の第七

に云わく「この經は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。  
もし人病有らんに、この經を聞くことを得ば、病は即ち  
消滅して、不老不死ならん」云々。

已上、上の諸文を引いて、ここに御病を勘うるに、六病  
を出でず。その中の五病はしばらくこれを置く。第六の  
業病、最も治し難し。はたまた、業病に軽き有り重き有  
つて、多少定まらず。なかんずく、法華誹謗の業病、最第一  
なり。神農・黃帝・華佗・扁鵲も手を拱き、持水・流水・  
耆婆・維摩も口を閉ず。ただ釈尊一仏の妙經の良薬に限

つてこれを治す。

法華經に云わく

上の

かみ

だいねはんぎょう

ほけきょう

さ

て云わく「もし、この正法を毀謗するも、能く自ら改悔し、

云わく

げんき

しょうほう

きぼう

しょうほう

のぞ

正法に還帰することあらば乃至この正法を除いてさらには

くご

ゆえ  
まさ

しょうほう

げんき

救護することなし。この故に応當に正法に還帰すべし」

うんぬん

けいけいだいしい

だいきょうみづか

ほつけ  
さ

云々。荊溪大師云わく「大經自ら法華を指して極となす」

うんぬん

い

ひと  
ち

たお

かえ

ち

お

云々。また云わく「人の地に倒れて、還つて地より起くる

がごとし。故に正の謗をもつて邪の墮を接す」云々。

ゆえ

しよう

ぼう

じや

だ

せつ

うんぬん

世親菩薩は本小乗の論師なり。五竺の大乗を止めんが

せしんぼさつ

もとしようじょう

ろんじ

ごじく

だいじょう

とど

ごひやくぶ しょうじょうろん つく のち むじやくぼさつ あ たてまつ  
ために、五百部の小乗論を造る。後に無著菩薩に值い 奉  
つて、たちまちに邪見を 翻し、一時にこの罪を滅せんが  
ために、著に向かつて、舌を切らんと欲す。著、止めて云  
わく「汝、その舌をもつて大乗を讚歎せよ」。親、たちま  
ちに五百部の大乗論を造つて小乗を破失す。また一つの  
願を制立せり。「我、一生の間、小乗を舌の上に置か  
じ」。しかして後、罪滅して弥勒の天に生ず。  
馬鳴菩薩は東印度の人、付法藏の第十三に列なれり。本  
外道の長たりし時、勒比丘と内外の邪正を論ずるに、その

ころげんか

と

じゅうか

しゃ

みづか

こうべ

心言下に解けて、重科を遮せんがために、自らの頭を刎は

ねんと擬す。謂うところは「我、我に敵して墮獄せしめん」。

勒比丘、諫め止めて云わく「汝、頭を切ることなれ。

その頭と口とをもつて大乗を讚歎せよ。鳴、急やかに起

信論を造つて外小を破失せり。月氏の大乗の初めなり。

嘉祥寺の吉藏大師は漢土第一の名匠、三論宗の元祖な

り。呉会に独歩し、慢幢最も高し。天台大師に対して已今

当の文を諍い、たちどころに邪執を翻破し、謗人・謗法の

重罪を滅せんがために、百余人の高徳を相語らい、智者

じゅうざい

めつ

ひやくよにん

こうとく

あいかた

ちしゃ

だいし くつしょう み につきよう こうべ りょうあし う

大師を屈請して、身を肉橋となし、頭に両足を承く。

しちねん あいだ たきぎ と みず く こう はい しゅ さん まんどう

七年の間、薪を探り水を汲み、講を廃し衆を散じ、慢幢を

たお ほけきょう じゅ だいし めつご ずいてい おうけい

倒さんがために、法華経を誦せず。大師の滅後、隋帝に往詣

そうそく きょうしよう なみだ なが

するに、双足を挾摑し、涙を流して別れを告げ、古鏡を

かんけん じょう しんじょく

観見して自影を慎辱す。

ごうびょう めつ ほつ かみ さんげ

業病を滅せんと欲して上のごとく懺悔す。

そ おも いちじょう みようきょう さんしよう きんげん

夫れ以んみれば、一乗の妙経は三聖の金言なり、已今

とう みようじゅ しょきょう いただき こ

当の明珠は諸経の頂に居す。

きょう い しょきょう なか

経に云わく「諸経の中において最もその上に在り」。

もつと

かみ

あ

い

ほつけ

もつと

だいいいち

でんぎょうだいしい

また云わく「法華は最も第一なり」。伝教大師云わく

「仏立宗」云々。

予、隨分、大・金・地等の諸の真言の經を勘えたる

に、あえてこの文の会通の明文無し。ただ、畏・智・空・

法・覺・証等の曲会に見えたり。ここに知んぬ、釈尊・大日

の本意は、限つて法華の最上に在るなり。しかるに、本朝

真言の元祖たる法・覺・証等の三大師、入唐の時、畏・智・

空等の三三藏の誑惑を果・全等に相承して帰朝し了わんぬ。

法華・真言弘通の時、三説超過の一乗の明月を隠して真言

りょうかい

ほたるび

あらわ

ほけきょうう

めり

い

両界の螢火を顕し、あまつさえ法華經を罵詈して曰わく

けろん

むみょう

へんいき

じがい

みょうご

い

「戯論なり、無明の辺域なり」。自害の謬誤に曰わく

だいにちきょう

けろん

むみょう

へんいき

ほんしすで

ま

「大日經は戯論なり、無明の辺域なり」。本師既に曲がれ

まつよう

なお

みなもとにご

なが

きよ

とう

り、末葉あに直からんや。「源濁れば流れ清からず」等と

にほんひさ

やみよ

ふそつつい

はこの謂いか。これによつて日本久しく闇夜となり、扶桑終  
に他国の霜に枯れんと欲す。

たこく

しも

か

ほつ

きへん

ちやくちやく

まつりゅう

いちぶん

きへん

ちやくちやく

まつりゅう

いちぶん

み

じやけ

しょ

としひき

としひき

としひき

だんな

しょじゅう

み

じやけ

しょ

としひき

としひき

としひき

も、はたまた檀那の所従なり。身は邪家に処して年久しく、

こころ  
じやし  
そ  
つきかさ

心は邪師に染まつて月重なる。たとい大山は頽るとも、た

とい大海は乾くとも、この罪は消え難きか。しかりといえ  
ども、宿縁の催すところ、また今生に慈悲の薰ずるところ、存外に貧道に值遇して改悔を発起す。故に、未来の苦を  
償つて現在に軽瘡出現せるか。

彼の闇王の身瘡は、五逆・誹法の二罪の招くところなり。

仏、月愛三昧に入つてその身を照らしたまえば、惡瘡たちまちに消え、三七日の短寿を延べて四十年の宝算を保ち、兼ねてはまた、千人の羅漢を屈請して一代の金言を書き顕し、正像末に流布せり。この禪門の惡瘡は、ただ謗法の一科

しょじ みょうほう がつあい ちようか けいそう い  
なり。所持の妙法は月愛に超過す。あに軽瘡を愈やして

ちようじゅ まね

長寿を招かざらんや。この語、徵無くんば、声を発して

いっさいせけんげん だいもうご ひと いちじょうみょうきょう きご てん

「一切世間眼は大妄語の人、一乘妙経は綺語の典なり。

な お

名を惜しみたまわば世尊験を顯し、誓いを恐れたまわば

もうもろ けんしょうきた まも あらわ ちか おそ

諸の賢聖來り護りたまえ」と叫喚したまえと、しか云う。

しょ ことば つ

書は言を尽くさず、言は心を尽くさず。事々見参の時

ご きょうきょうきんげん

を期せん。恐々謹言。

にちれん

かおう

十一月三日

日蓮

花押

おおたにゅうどうじのご へんじ

太田入道殿御返事